


 巻頭言

植物防疫研究に携われて

 香川県農業試験場病害虫防除所 所長 **もり 森**
みつ たか 充 隆


思い起こせば36年前、新規採用職員として病害虫防除所に配属され、何をやる場所かもわからず、門をたたいたその日に発生予察情報会議なる場で挨拶をしたことが懐かしい。それから、60歳を迎える今年まで、33年間にわたり植物防疫関係の仕事をしてもらってきた。その中でも植物の病害に関して、国や他県の先輩方々の叱咤激励を受けながら、かつ、研究に精力的に取り組む後輩各位に囲まれて、好きな研究業務に長い間携われ、まだ終わってはいないものの、充実した県職員生活であったと思う。今般、巻頭言の執筆の依頼を受けて、さて、この間何か役に立つものを残せたのだろうかに思いをはせ、自身の経験を踏まえて、今後、植物防疫を担うであろう方々に期待したいことを身勝手ながら書いてみたいと思う。なお、残せたことについては、あくまで自己評価であることをご容赦願いたい。

最も自己評価として高いことは、現在の香川県における植物病害の同定・診断体制の確保のためのきっかけを作れたことだろうか。現在の体制が構築できたのには、優秀なスタッフの存在と鋭意努力の賜物であるには違はなく、また、時の理解ある上司や諸先輩方の尽力のおかげである。私が、最初に病害虫防除所に配属になった当時、防除所にはクリーンベンチなどの施設はあったものの病害の同定・診断に関して、病原菌分離や抗原抗体反応検査について知識を持った人はおらず、他県を含む県の試験場や国の試験研究機関であった旧四国農業試験場の方々にお教をいただきながら徐々に知識や技術を習得していったものである。しかし、県の研究員には異動が付き物で、如何に得た知識や検定技法などの技術を継承していくかが大きな課題であると痛感し、時の所長らに、試験補助として採用されていた今でいう会計年度任用職員の方に技術継承を行うことを提案し、また、技術を持った方を長期間雇用できるよう働きかけを行った。それから20数年経った今では、スタッフ個人の知識や技術に頼るところではあるものの、病害の同定・診断のための、顕微鏡観察に加え、糸状菌、細菌の分離培養、エライザ検定等の抗原抗体検査、PCR検定に即座に対応できる。病原菌の分類が目まぐるしく変わり、検定技

法も日進月歩である中、若手の教育機能も持たせつつ、敢えて属人的な体制をとっているものの、如何にこの体制を維持していくことができるかを常時考えつつ必要に応じて変化もしていってもらいたいと思う。

次に、元富山県、現日本植物防疫協会の守川氏の呼びかけで、有志らとともに「生態と防除研究会～植物病害カンファレンス～」の立ち上げメンバーの一員として携われたことである。植物病害の防除のためには生態研究が必要不可欠であるものの、県の試験研究機関では、回転の速い人事異動によって腰を据えて生態研究をすることが困難であることが危惧されていた。そのような折、生態研究のための組織を超えた横のつながりの機会があるべきとのコンセプトを基に立ち上げ、コロナで一時的にお休みはあったものの、対面での研究会の開催を継続してきている。多種多様な作物を対象としつつ、ウイルス、細菌、糸状菌等のまったく性質の異なる病原体を扱う我々の業務は多岐にわたる。そのような中で、生態研究に基づいた防除技術開発の具体的なアプローチについて語り合えることは、私にとっても有意義な時間である。病害の防除研究について、私は常々「元から断たなきゃダメ」という考えで取り組んでいたものの、病原体の生態がわからなければ元から断つことはできない。温故知新というように、数多くの先人達の生態研究について読み解くことは前提として、防除手段を講じるうえで、まだまだ、解明できていない病原体の生態は数多くあると思え、新たな生態研究による知見が必要となることから、今後、植物防疫に携わっていく研究員には、これら研究会を利用して効率良く生態研究を進めてもらいたいと思う。

また、環境負荷軽減の観点から総合防除の必要性が叫ばれる中、的確な同定診断に基づいた発生予察や病原体の生態を知ったうえでの防除手段の選択の重要性が増してくるであろう。これらの同定診断や研究体制を維持、発展させるためには、長期スパンの取組みによってやっとなせるものであるとは思っているものの、そのときに居た植物防疫に携わる人が意識していることが肝要ではないか。